

校長先生の初恋物語

第40話 救世主



ハンバーグの入っていないお弁当箱を持って、とっくんは学校に行きました。あかほりやおやおじさんのあいさつをむし。豆腐屋さんのお婆さんのあいさつむむし。肉屋のおじさんは、なんだかこわれた店のシャッターをなおしていましたがとうぜんむし。いつもはいろいろな人とあいさつをして学校に行くのに、すべてむし。とっくんは、いらいらしていたんです。ハンバーグがないということが、たまらなくいやだったんです。

学校に着くと、となりの席のよしこさんが、すぐに声をかけてきました。

「とっくん、お・は・よ・う♥わたし、ハンバーグつくってきたよ。とっくんも上手にできたんだよ。」にっこり笑顔でそう言いました。その顔があまりにもかわいらしくて、とっくんは、お母さんがびょうきでハンバーグを作ってくれなかったと言いだせませんでした。

「とっくん♥みんなにはないしょね。お弁当の時間が、楽しみだな。」

最悪の遠足がはじまりました。空は晴れていても、とっくんの心はまったく晴れません。みんなは楽しそうに歩いていましたが、とっくんは無言で、とぼとぼ歩いていました。心の中はハンバーグのことでいっぱいです。「よしこさん、がっかりするだろうなあ。愛のハンバーグなんて、くれないだろうなあ。約束を破ったことをおこるんじゃないかなあ。お弁当の時間がやだなあ。」悩みながら歩いていました。

そんな元気のないとっくに気がついた人がいます。それ

ないしょね♥



が、足長君でした。「とっくん、どうしたの。元気ないねえ。遠足なのにさ。」とっくんは、おもいきって足長君に話しました。よしこさんのハンバーグのことなので、足長君はしつとするかもしれないけど、なんといっても足長君は学級委員ですから、とっくんのなやみそうだんをうけとめてくれるかもしれません。

「なーんだ、とっくん、そんなことで悩んでいたのか。ぼくに任せといてよ。」

いがいにも、足長君はとっくんのことを助けてくれそうです。「ぼくのお弁当の中には、ハンバーグが入っているんだよ。朝お母さんがハンバーグを作っているのを見たから、間違いないよ。そのハンバーグをとっくんにあげるよ。そのハンバーグをよしこさんと、交換しなよ。」

心は一気に晴れました。よしこさんをだますことになってしまいましたが、とっくんに残された道はこれしかありません。足長君の提案を受け入れることに、迷いはありませんでした。



その後、ようやくとっくに笑顔がもどり、みんなと一緒に遠足を楽しめました。そして、まちにまっていた、お弁当の時間がやってきました。この日一番楽しみにしていた時間です。よしこさんの愛のハンバーグをいよいよ食べることができるのです。

しかし、このお弁当の時に、とっくんは、信頼していた足長君に、うらぎられてしまうのです。そりゃそうです。足長君だって、よしこさんがすきなんです。愛のハンバーグをとっくんにとられたくないという気持ちが心のそこにあっただんです。

次回予告 足長君の裏切り

